



パピルス & エレクトロニクス

はびるにくす

学校法人大阪工大摂南大学図書館

〒535 大阪市旭区大宮5-16-1

06-952-3131

想 出 と 読 書

図書館長 川島 普

小学生の頃、宍道湖のほとりの母の実家から夕焼に沈む西の山々のすぐ向うに、「小学1年生」の雑誌でみたアメリカがあるのかと思った。理科の本に、菜の花や桜の花の構造が図解されており、顕微鏡でのぞいた双子のような松の花粉や蝶の鱗粉や、水中の種々のプランクトンなどのミクロの世界に魅せられて胸をときめかした。中学生になって、「野口英世伝」を読んで細菌学者に憧れたり、「子供の科学」を愛読して星のおじさん野尻抱影氏の天文の話しに痛く興味をもち、手製の望遠鏡で夜空をあかず眺め宇宙とは一体何だろうと思ったりした。中学の「生物学」の本には何かしら子供の夢をかき立てるものが多かったと思う。京城に住んでいた戦争中の旧制高校時代には、本も少なくなっていたが、本町の丸善に行くのが楽しみであり、ダンネマンの「大自然科学史」を読んだ記憶がある。海軍予備学生に入隊するので当分活字とはお別れかと淋しい気がした思い出もある。戦後は全く悲しい位本がなかった。京大1回生の頃、山崎榮著作「微分方程式通論」がどうしてもほしく、先輩に借りて1ヶ月かかって全文をノート572頁に写したことがある。

中央公論社「世界の歴史」(17冊)、文藝春

秋社「大世界史」(26冊)や日本の歴史全集を読んで大変よかったと思う。10年前ヨーロッパ旅行をした時、歴史の重みを痛感し歴史の勉強は非常に大切だと思



った。現在の文化を少しでも深く理解し、さらには未来を考えるには歴史の知識なしでは考えられない。グローバルな視野に立って21世紀へ挑戦される若い学生諸君は、今こそ歴史の勉強からじっくりと取組んでもらいたい。

最後に、ここ15年ばかり新聞記事の切抜きを15位のジャンルに分類してスクラップブックをつくることを趣味としています。貴重な記事はいつでも心を楽しくします。



ひかる中央図書館

菅

博(工大・電子工学科・教授)

教育の三本柱は徳育、知育、体育だと言われます。図書館はこのうちの徳育と知育を担うサービス機関であり教育機関でもあると思います。

図書館は日常のけん騒からちょっと距離をもった、ちょっと優雅な空間です。そこでは和やかな、豊かな気持ちになります。入館すると他人に迷惑をかけてはいけないという道徳の原点に心が自然に帰ります。

図書館利用案内に「奉仕の内容」という一項目があります。この「奉仕」という言葉は日頃忘れ勝ちなだけに、目に入る度にいつもハッとさせられます。図書館に一步足をふみ入れた時から徳育が始まっています。

さて、中央図書館は近代的な高度なサービスを行う大学図書館として有名です。すでに昭和57年には図書館総合情報管理システムを稼働させ、現在では全国大学ネットの学術情報システムがオンライン利用出来るまでになっています。中央図書館は、全国の大学図書館に先駆けてこれらのサービスを開始するなど、単に利用者の要求に応えるというよりもむしろ種を蒔き、育てるという姿勢で運営されています。これぞ知育をリードし、強力にバックアップする大学図書館と敬服・感謝しています。

この上のサービスを期待するのはどうかとも思われますが、せっかく戴いた機会ですので、希望を述べたいと思います。

それは「自宅からでも深夜でも利用できる図書館」の実現です。このシステムはほんの数年前までは、未来の図書館のあるべき姿として夢のように語られていました。しかし、ここ一、二年のコンピュータおよび通信技術の進歩によって夢ではなく、現実のものとしてとらえ得るようになりました。ここは是非、先駆的な中央図書館に、全国の図書館に先駆けて実現して戴きたいものだと思います。

いま、自宅でレポートを作成中知りたい事

項、たとえば「LSI」が発生したとします。こんなとき、まずパソコンのスイッチを入れ、電話回線を通じて図書館システムに接続します。これで準備OKです。



つづいてパソコンのキーからキーワードである「LSI」を入力します。するとパソコンのディスプレイにLSIについて書かれている本の書名や著者名が次々と表示されます。これと思われる本を指定すると、その本の目次と索引が表示されます。必要な頁数を入力すると本文が画面に表れます。次々と頁を繰り、必要な箇所をプリントします。

上記のパソコンと図書館システムとの接続は、モデムといわれる比較的簡単な装置によっておこなわれます。

一方、図書館では、色々な本の内容を予め光デスクのような記憶装置に蓄えておく必要があります。「LSI」のようなキーワードから書名を検索するためには、本の索引や目次をキー入力しなければなりません。本文の方はビデオカメラでいっきに入力することが出来ます。

こうしてコンピュータ利用によって知育の効率を格段に高めることは、さして技術的困難無く出来そうに思われます。

しかし、一方において、大学者の手になる名著を、文豪の手になる名作を、時間をかけて読み終えたときの、あの心の震えるような感動を、充実感を与え得るようなシステムの構築はなお至難であると思われれます。電子メディアに対し紙をつかった昔ながらの図書館が、電子図書館に対しなお厳然と存立し続けるものと思われれます。温故知新のところで中央図書館がひかり続けることを祈ります。

シリーズ 『淀川ぶらり散策』

第7話 蕪村と毛馬 その2 放浪

こがらしや岩に裂(さ)け行く水の声

画と俳諧の修行のために江戸へ出た蕪村は、其角・嵐雪に連なる早野巴人(はじん)の門下に入った。俗化していた当時の江戸俳壇の中であって、巴人は「祇空、巴人は心の芥吐き尽して跡よりすらすらと出たるこそ、泥に染まぬ蓮より潔し」と評されていた人物で、その清高な作風と高潔な人格から蕪村は多大な感化を受けたのであった。この巴人が寛保2年(1742)に没した後、蕪村は江戸を離れ10年近くにわたり関東から東北を放浪した。この間旅の空の下、数々の辛酸を嘗めるとともに、孤独な経験を味わった。この時に歌った「北寿老仙をいたむ」の詩に蕪村は、

君あしたに去りぬゆうべのころ千々に
何ぞはるかなる
君をおもふて岡のべに行きつ遊ぶ
をかのべ何ぞかくかなしき

と、それまでの我が国の詩には見られない、自由で伸び伸びとした美しい言葉の流れの中、友を亡くした孤独と虚無と無常感を歌い込んでいる。この詩は、巴人門下のはるか先輩にあたる下総国(今の茨城県)結城の素封家、早見晋我(しんが)への追悼曲として蕪村が献じたものである。しかし、彼にはこの詩を公にする気持はなく、公表されたのは蕪村没後のことであつたと伝わる。晋我の死(1745年)に先立つこと3年前、師巴人を亡くしていた蕪村は、この詩に、忘れえぬ師に対する思慕の情をも看ていた、というは言い過ぎであろうか。いずれにしても、

短期間の内に師と友を亡くした悲しみは、深いものがあつたと思われる。

東国の放浪を終えて後蕪村は、宝暦元年(1751)江戸から京に上洛した。上洛後も、さらに丹後の与謝に3年、四国の讃岐に3年と、流浪の生活を送っている。時代は、老中田沼意次が権勢をふるった時期であり、その放漫な政策のために汚職がはびこり、享樂的傾向が強く、華美で耽美的な風が支配していた。故郷毛馬を捨てた放浪者蕪村にとっては、画と俳諧で名を為すほどにしか他に身を興す道がなく、また安定した生活を得るのは困難なことであつた。この時代、江戸座等の既成俳壇が幅をきかす中、地方出身の若き俳人達が自分の門戸を構えるのは極めてむつかしく、その多くは蕪村同様、諸国をさすらつたのであつた。しかし、それだけに既成の俳壇の風にとらわれない、みずみずしい新しく若い感性が、当時の平俗に墮した、奇矯な弊に陥っていた俳壇を一新し「芭蕉に帰れ」と「蕉風復興運動」を強め、明和から安永・天明期(18世紀後半)にかけての、あの俳諧中興期の隆盛へと結実したと言えよう。

宝暦7年(1757)秋、丹後から帰洛した蕪村は、終の棲みかを京に定め、ようやく一家を営むようになった。この京に居を構えて以降晩年に向けて蕪村は、画において池大雅と並び賞され、また正岡子規以降の現代日本蕪村派へと脈々と息づく詩的夢想の世界をかたちづくる作品を次々と完成させていくのであつた。

燭(しょく)の火を燭にうつすや春の夕

「第7話 蕪村と毛馬 その2 放浪」 完

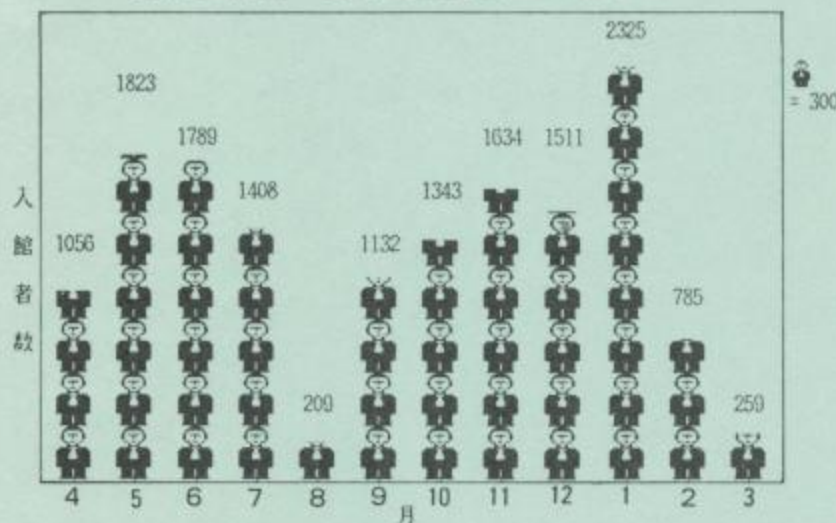
図書館活用の手引き No.14

～試験期間中の図書館利用～

まもなく後期試験。学生諸君にとっては忙しい時期が到来します。期間中、図書館には連日多くの利用者がつめかけ、図書館としても嬉しい限りです。

次のグラフを見て下さい。これは、昨年度の入館者数の一日当りの平均です。

昭和61年度 月別入館者数の一日平均



月別の絵グラフを見ていきますと、一月が圧倒的に多く、ついで五・六月となっています。五月は、学期の始まりと同時に新入生が希望に燃えている時期でもあり、勉強意欲が高いために入館者も多いと思われます。六月

は前期試験、一月が後期試験の時期です。当然、ラストチャンスをもにものにするため、図書館の利用も増えようというものです。しかし、ここに単純に喜べない事情があります。

試験期間中の図書館利用は、情報交換の場と化し、静かに学習したい学生からの苦情が絶えません。係員が注意を促すと「静かにしてたら勉強でけへん」との応答。彼等は大半が、10人前後の小集団をいくつも形成し、試験情報の交換に余念がない。「最近勉強の仕方が変わったのかな？」と思いつつも、図書館としては好ましい学習環境を維持することが責務であると考えています。

利用者の皆さんの協力と自覚をお願いします。



編集後記

○思い出に残る本とは、機会があれば読み返してみたいと思う本ではないでしょうか。誰でも過去に1冊や2冊、感銘を受けた本があると思うのですが、最近はそのような本にとんと出会いません。怠惰なのか情報に押し流されているのかよくわかりません。しかし、活字に飢えて貪り読むということはなくなりました。

新刊書が年間4万冊近くも刊行される現在、「何を、どう読むか」は本当に難しいことで、今年は、ぜひ「心を楽しくさせる」読書に努めたいと思います。

○「ひかる中央図書館」。今回は電子工学科の

菅(すが)先生にご寄稿戴きました。図書館サービスについてのご希望の数々、実現する日もそんなに遠いことではないかもしれません。楽しみにするとともに、一番大切な利用者との触れ合い、コンピュータは手段であって目的ではないということを、念頭において、今後とも努力したいと考えています。

○与謝蕪村(1716～1783)は江戸中期の俳人・画家で芭蕉と並び称される人物です。その影響は現代にまでも及び、今話題の「サラダ記念日」の著者、俵万智さんも蕪村に学ばれたところが多いのではないのでしょうか。

○さあ、いよいよ後期試験。図書館も大忙しです。今年は静かかな!?